

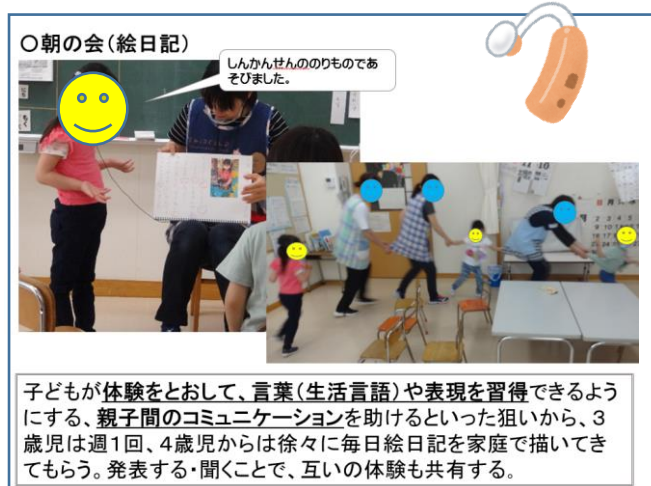
令和4年度 一関清明支援学校「公開講座」報告

令和4年度一関清明支援学校 公開講座「聴覚障がい児への支援～幼少期から高等部卒業まで～」を8月3日（火）に本校舎で行いました。各年齢段階の聴覚障がいのお子さんへの支援経験がある本校職員3名が講師を務め、外部からは8名の先生方にご参加いただきました。

当日は、きこえについて、オージオグラムの読みとり方、補聴機器についてなどの基礎的な内容と、乳幼児期、小中学部、高等部での学校における支援と卒業後の生活について、支援のポイントを具体的な指導方法や取り組みの様子を交えながらご紹介しました。

参加者の方からは、「それぞれの時期に合った支援の仕方を聞き、参考になった」「補聴器をつけている＝完全に聞こえているということではないことを常に心に留め、関わるようにしたい」等の声が聞かれました。

～配付資料より(一部抜粋)～



本校職員の取り組みに共通していることは、

目で見て分かる ということです。

聞こえにくい児童生徒にとって、音声を聞き取って理解するのは、知らない方言や英語で話を聞くのに近いかもしれません。

- ・必死で聞き取って理解しようとする。
⇒かなりの集中力が必要で疲れる。
- ・分かるところと分からないところがある。
⇒分かった部分をつなげて理解しようとするので、曖昧な部分や勘違いが生まれる。

聞こえにくい児童生徒にとって

目で見て分かる情報は「安心」

自己理解のための取り組み

主に「自立活動」の時間に自分の聞こえについて理解を深めている。



自立活動について

- ・聴覚障がいによる学習上または生活上の困難を主体的に改善、克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、心身の調和的の基盤を培う領域。
- ・聴覚障がいの特性を踏まえると「環境の把握」、「コミュニケーション」などと深く関連づける必要がある。

<アンケートから> (たくさんいただきましたが、その中から一部掲載します。)

- ・授業の中で、言葉だけで教えようとするのではなく、イラスト等を添えながら教えるようにしたい。
- ・マスクを着用して保育を行っているので、口の動きを見せながら会話をするのが難しい状況。表情、仕草に十分意識して、丁寧に関わるようにしたい。補聴器をつけ直した時に聞こえの確認をするよう、職員間でも伝え合いたい。
- ・ロジャーを使うようになり、言葉の入り方が変わったと感じる。ロジャーの聞こえを体験してみたい。

*令和5年度も開催予定です。



TEL 0191-33-1600

担当：幼小学部・教諭 伊藤起子